

時報新報

東京 明治十七年八月十三日 土曜日 第七百五十一號 日曜日休刊 定價三錢

○明治十七年八月廿八日
任東京女子師範學校教諭
任東京商業學校教授兼幹事
中川謙二郎
成瀬 正忠

時事新報

國ヲ立ルハ身ヲ立ルニ異ナラズ今、後進ノ輩ガ少小ノ時ニ
事ビ得タル智識技能ヲ以テ社會ノ表面ニ立身セントスル
コトハ先ツ其才人ニ知ラレ、コト大切ナリ名ヲ知ラレテ而シテ
才後ニ其智識才不才ヲモ人ニ評論セラル、才得ベシ評論或
ハ當ラザルモノモ多カラント雖モ當ラザルモノアレバ當ル
モノモ亦アル可ク免ニ角ニ世ニ名ヲ知ラズシテハ其人ハ
即チ無キニ等シキモノナレバ仮令如何ナル能力アルモ世
評ニ掛ルノ機ヲ得ズシテ遠ニハ社會ノ暗處ニ没ス可キノ
ミ是即チ古今ノ後進輩ガ名ヲ知ラレ、コト派々タル由縁ナリ
ノ國モ亦斯ノ如ク今ノ世界ニ於テ歐米ノ諸國ハ夙ニ文明富
強ノ名ヲ成シテ明著ナルガ故コト其諸國中國ヨリ貧富強弱ノ
差等ハアレトモ各其實ニ稱フタケノ名聲ヲハ誤ラレ、コトナシ
シテ云ハ、一尺ノ物ハ一尺ノ名ヲ取リ十貫目ノ物ハ十貫目
ノ評ヲ得タルモノ、如ク然ルニ獨リ我日本國ハ開國僅ニ三
十年眞ニ文明ノ針路ニ向フタルハ維新以來未ダ二十年ニ足
ラズ人ニ知ラレ、コト後進ノ少年其志能ノ如何ニ論ナク世
ニ名ヲ知ラレ、コト難キ者ト一般ニシテ仮令我國人ガ熱心
文明ニ進テ文武ノ所得アルモ世界無數ノ公衆ニ於テハ我文
明ノ程度ヲ評論スルモノナキニモカ甚キキ日本國ノ名サ
ヘ知ラザル者多シ即チ我文明ノ實ハ一尺ニシテ一尺ノ名ヲ
空ウケ、十貫目ニシテ十貫目ノ評ヲ得ズ名實相對シテ名ヲ
失ヒ實ヲ誤ラレ、モノノコト我輩ノ常ニ遺憾ニ堪ヘザル所
ナリ然リ而シテ人ノ名ヲ知ラレ、コト横ハ文武ノ功名兩様ニ
在リト雖モ武功ハ最モ世人ノ耳目ニ觸ル、コト速ニシテ其心
情ニ感スルコト深シ例ヘバ學者ガ幽孤燈ノ下ニ沈思スル
ノ勞ハ實ニ削骨ノ苦痛ニシテ其功績モ亦甚ク大ナルモノ多
シト雖モ如何セシ大抵皆目下ノ人事ニ直接セザルノ功績ニ
シテ社會多數ノ人ハ之ニ必チ留ルモノナシ其反對ニ於テ武
邊ノ功名ハ大ニ懸チ異ニシテ一擲一兵卒ガ級ニ馬ヲ走ラシ
除チ除ヘタルノ機ニテ大ニ世間ノ喝采ヲ得テ名聲ヲ發揚
スルヲ常トス國モ亦斯ノ如ク今ノ一國ノ名聲ヲ發揚セントス
ルニ其方便ハ文ヲ以テスルヨリモ武ヲ以テスルノ活潑ナル
ニ若カザルコト明白ナラン日耳曼ガ獨逸ノ一小侯國ヨリ起リ
テ目下歐洲ニ恰モ政治交際ノ權ヲ專ニスルモ唯其武力ニ由
ルニシテ露國ガ北隣ニ隣在シテ歐亞二洲ニ雄視スルヲ得ルモ
恃ム所ハ唯武力アルノミトシテハ昔ク人ノ知ル所ナラン又
歐米諸國一體トシテ常ニ亞細亞ニ對シテ先鞭ヲ著シ東洋
人ハ常ニ第二流ノ地歩ニ位スルモ其近因ハ東西武力ノ隔斷
ト其威名ノ輕重トニ在ルモノト云ハザルヲ得ザルナリ
左レハ今國ハ東洋ノ不幸トシテ他國ノ高麗ヲ生ヅリ即チ

西洋人ガ東洋諸國ニ對シテ其武ヲ耀カスノ時ナレバ此時ニ
當テ我日本國ハ如何ス可キヤ我レハ初メヨリ此高麗ニ關ス
ル者ニ非ズト雖モ地運ヨリ見テ東洋諸國ノ名ハ免カレサルモ
ノナレバ西洋人ガ東ニ向テ耀カス其武威ノ光ニ照ラサレテ
默々退縮シ尋常一機東洋諸國ノ名ヲ甘受ス可キヤ甚ク悅バシ
カラズ、我輩固ヨリ戰等ノ不幸不祥ヲ好ムモノニ非ザレド
飯ニ愛ニ想像ヲ書キ今回ノ事變最初ヨリ我國ニ關係アリ
モノトシテ切事ノ破裂ニ及ビ止メテ得ズシテ支拂ニ與ニス
ル歟、又佛蘭西ニ與ニスル歟、兩様孰レカノ地位ニ立ツモノ
トセンニ日本ノ兵ガ清兵ト異ニ佛兵ニ立同ヒテラバ其勇武
伎倆固ヨリ清兵ニ十倍シテ佛兵ヲ當ル可キヤ論テ俟タズ或
ハ佛軍ト並ビ進テ清兵ヲ伐シテ我軍律ノ整齊兵士ノ勇猛
毫モ佛人ニ讓ル所ナキニシテラバ其勇氣ノ士氣ニ至テハ
必ズ其右ニ出テ、目覺マシキ勳ヲ呈スルコトナラン即チ我武
力ヲ世界中ノ耳目ニ披瀝シテ我名聲ヲ發揚シ日本ノ地理コ
ソ東洋ニ在レ其人ハ則チ東洋人ニ非ズトテ西洋諸國ノ人ヲ
シテ東洋自カラ國アリ、與ニスル易カラズ、憚ル可キトノ事實
ヲ發明セシムルノ機會ナラン歟ト思ヘドモ是レハ唯一場ノ
想像圖畫ニシテ實際ニアル可キ事柄ニ非ズ又國ノ安寧ノ爲
ニ最モ忌ム可キ事柄ニシテ我輩ハ斯レ不幸不祥ノ我國ニ降
來ラザルヲコソ祝スルモノナレバ今日ノ要用ニ於テ實地戰
争ノ事ハ深ク之ヲ慎テ飽クマゾ局外中立ヲ守ル可シト雖
モ此中立ヲ守ルニ就テ我海軍ハ既ニ英米其他諸國ノ聯合艦
隊ニ列チ爲シタルガ故ニ此聯合中ニ在テ一際自立ツ程ノ活
動ヲ演スルハ實ニ千載一遇ノ好機會ナラン可シト信ス言少シ
ク婦女子ノ痴ニ似タレシ辛苦衣裘ヲ作リテ家計ノ許ス限リ
ハ華美ヲ盡シ、領數ヲ多クシ、平時ノ沐浴紅粉ノ粧ヲ忌マザ
リシハ何ノ爲ナレヤ春晴ノ觀花、秋夜ノ盛宴、晴レノ會席ニ
秀麗嬌媚ヲ誇リ衆人ノ耳目ニ情ヲ収攬セントスルモノヨリ
外ナラズ左レハ今度局外ノ諸文明國ガ國民保護ノ目的ヲ以
テ組織セタル聯合艦隊ノ一舉ニ我海軍ノ爲ニ幸甚幸甚ト觀
花、秋夜ノ盛宴ニシテ然カモ奉承求メテ得ベカラズ千載一
遇晴レノ會席ナレバ海軍ノ將士ハ平生ノ伎倆ヲ逞ウシテ活
潑ノ勳ヲ呈シ唯值ニ其艦隊ニ加入スルノミナラズ隊中目カ
ラ著明ナル部分ヲ占メ同列國ノ人ヲシテ満足セシメシコ
ト我輩ノ痴心コレヲ冀望シテ自カラ禁スル能ハズ或ハ軍艦ノ
綠台ニ水兵ノ數ニ於テ都合モアラバ陸軍兵ヲ用ルモ至極適
當ノ事ナラン免ニモ角ニモ武事ヲ以テ國ノ名聲ヲ揚ゲ西洋
文明國ノ人ヲシテ日本國アルヲ知ラシメ、日本ニ海陸軍ア
ルヲ知ラシメ、日本ニ軍律アルヲ知ラシメ、日本ノ將校ニ智
略アリ海軍兵士ニ藝能アリ陸軍將士ヲ知ラシメ、日本ハ東
洋ニ在テ東洋諸國ニ非ズ一獨特特別ノ新西洋諸國ナリト實ヲ知
ラシメ、我帝國ハ永ク東洋列國ノ名聲ヲ脱シテ西洋諸國ト
並ビテ與ニスル共ニ文明ノ利益ヲ利シテ文明ノ幸福ヲ享ケ治
理ニモ亂ルモ文明開進ノ方向ヲ決定スルハ今ノ一舉ニ在リト
シテ我輩ヲ可クシテ

電報

○八月廿八日長崎發 猛烈なる暴風去る二十五日の午後よ
り夕刻に掛けて九州を吹襲し阿蘇の財産に到る處大損害
を加へたり夫れよ就き日本形勢を共に生命を失ひふるも
の少なからず長崎、高島、島原、唐津にては特多し但し各
地の報告は未だ達せず唯右に挙げたる二三箇處よりの報道
ありしのみ當地に來着の各汽船は大抵風災の詳報を持ち來
り又其汽船が救ひ得たる難船者も載せ來り熊本にては家
屋は倒壊せしもの三百軒餘に及び比叺縣の沖繩縣よりの諸
途右暴風の頗る猛烈なるものに出逢ひされども船隻及び其
吊り掛け機具を失ひふるのみならず無難に之を乗り抜けり
○八月二十八日龍動發 サイ、ガアチット、ウチルセレイは
即時埃及ニ向け出發すべし
○八月二十一日廣東發 廣東の外國人居留地沙面の要價
昨年中廣東の土人ガ沙面を襲撃したるに就き居留地の被害
者より支那政府に申出たる要價なり）は最初十九萬四千七
百三十四弗の申出なりしが昨日十三萬六千五百弗に決定さ
れたり
○八月十九日龍動發 佛國ツロン港の虎列刺病は益々増
加し目下伊太利に侵入せり
○八月廿日龍動發 虎列刺病英國ベルミンガムに侵入せり

佛清事件

○天津特報 一昨廿八日刊行の橫濱ガゼット新聞に本月
十三日清國天津發の特報を其紙上に掲げたり其報中に曰く
當時佛國が其兵艦を福州閩江下流に集ふるは其意を解す
る能はざる所あり福州之兵を用ふるは地處不適せず閩江は水
淺くして馬尾の船渠も僅るは水深十八英尺以下の船艦を修
運せるの用に適するのみれば戰艦の福州小湖るは容易の
事ニ非ず今清國の沿岸に就き佛軍が占據に利あるの地は揚
子江中、北之揚州、市は鎮江、南京の三所に由て圍繞され
る三角洲に若くものかし敵國若し斯地を占據せば坐して清
國の運命を制すべく愛親愛親氏の安危ハ無論清國の存亡は
其れ意中に在らんのみ唯斯の權力を得んと欲せば兵士四
萬、及び甲鐵艦、砲艦の一大艦隊を要するのみ云々又曰く清
國ハ人物不乏しからず直隸總督李鴻章の特に才略ニ富めり
と雖も不幸にして人の嫉視する甚しく百事他人の妨げを
受けて其驥足を伸ると能はざり今や年歳も老ひたれを前途
く望を置くも足らず氏の外に人物といふべきは當時廣東總
督張之洞其人あり張氏は幸に春秋に富るを以て大に望を
屬するも足れり云々
○上海の風聞 人心洶々然其傳は因より判斷し難けれど
も去る十九日の上海新聞に清廷にて之を貴族總督等統率とし
て邊疆を出で、劉永福會同し進んで敵軍を剿せし又東南
北洋各海防大臣に諭し佛人若し兵艦を諸河口に泊し何事と
ら爲さんとせる様子を以て之を攻撃す可しと云ふ一議